

特別企画

仏像大好き芸人・みほとけと  
仏像イラストレーター・田中ひろみの

## 古都仏像めぐり

旅人＝

みほとけ

Mihotoke

田中ひろみ

Tanaka Hiromi

文＝ペリー 荻野

Perry Ogino

写真＝佐々木実佳

Sasaki Mika

室生寺の寶物殿。奥の三体は右から釈迦如来、十一面観音、地藏菩薩（いずれも平安時代）。手前は十二神将（鎌倉時代）で、右から卯神、辰神、巳神、未神

悠久の時を超えて伝えられてきた仏像。わけでも都の置かれた奈良や京都には、国宝級の仏像が多数安置されています。人びとを癒し、祈りを受け止めてくれる仏像という存在を愛してやまないみほとけさんと田中ひろみさん、仲良しのふたりが、古都仏像めぐりへ出かけました。

魅惑の仏像がおわす

女人高野

室生寺

奈良編

仏像のもののまねで知られる芸人のみほとけさんと、全国の寺院や仏像を訪ね、その魅力を発信するイラストレーターの田中ひろみさん。仏像をこよなく愛するふたりの旅は、写真家・土門拳も足繁く通った奈良・室生寺から始まった。

県北東部の山々に囲まれた室生寺は、奈良時代の創建。高野山が女人禁制だった時代から、女性たちを迎え入れていた「女人高野」の道場として親しまれ、一帯は龍神信仰の霊地としても崇められてきた。大阪出身の田中さんは、幼いころ、家族で境内のしゃくなげをよく見に来たそうだ。

旅館や茶店が並ぶ門前の通りから、室生川にかかる朱塗りの太鼓橋を渡って、寺の山門へ。木々が繁る境内の「鎧坂」と呼ば

特集

# 井波彫刻 「富山」 木槌の音が 響く町

文＝植松一郎

Uematsu Iiro

写真＝荒井孝治

Arai Koji

富山県南西部、砺波平野の南端に

木彫の町があるのをご存じでしょうか？

精巧で躍動感のある深彫りが特徴の

「井波彫刻」の町、井波です。

これまで、井波彫刻といえば、

室内を飾る「欄間彫刻」が有名でした。

その井波彫刻が、今、変わりつつある――

そんな話を耳にして、井波を訪ねました。

当地には、井波の伝統を受け継ぎつつ、

新たな表現に挑む作家たちがいました。





【右頁】井波彫刻の概念を変える彫刻家、田中孝明さんの作品 【右】複雑な欄間彫刻を制作中の前川正治さん 【左】瑞泉寺太子堂を飾る豪華で精緻な欄間彫刻





part 1

# 井波彫刻の みなもと

人口約8000人のうち、100人をこえる人が

彫刻師として活躍する町、井波。

2018年には「宮大工の鑿一丁から生まれた  
木彫刻美術館・井波」として日本遺産に認定されました。

日本一の木彫の町の歴史をたどって、

風情ある町を歩きます。



瑞泉寺へと続く八日町通り。奥に見えるのは八乙女山

まぶしいほど白い清浄な石畳だ。紙屑ひとつ落ちていない。幅広く、まっすぐの道は滑走路を連想させる。山へ向けてゆるやかに上っているの、このまま進んでいくと空へつづくか、と。

砺波平野の南端に位置する南砺市井波地区の八日町通りである。滑走路ではない証拠に、道の両脇にずらりと建物がつづく。いずれも温もりに富む、懐かしい趣。どこか時代劇の風情もある。そういえば、通りを少し入ったところこの地を「父祖の

地」として愛した作家、池波正太郎を偲ぶ小さな記念館もあると聞いた。

石畳の道は古寺へと導く。だから参道といえるだろうが、参道沿いにありがちな土産物店は見当たらない。そのかわり、あちこちから「木」の字と「彫」の字が目飛びこんでくる。静けさのなか、ときおりコンコンと乾いた音が晴れた空に反響しているように聴こえるのは、木を彫っている鑿の音。彫刻の制作工房が何軒も並んでいる参道なのだ。

看板もベンチもバス停も木彫作品なので、つい立ち止まって見上げたり、近寄って眺めたりしてしまい、なかなか前へ進まない。建物の表に掲げられた牛や鶏などの動物の

作品が目に残って、「おや、肉屋には見えないけれど……」そう考えていると、通りをゆったり歩く紳士がにこやかに会釈してくれる。動物の意味を訊ねると、

「あれは店や工房の当主の干支ですよ」

なるほど、たしかに鼠もいれば犬も兎もいる。にわかにそれらの当主に親しみをおぼえるのがふしぎだ。

教えてくれた紳士、池田誠吉さんも八日町通りに工房をもつ彫刻師だ。北海道の富良野出身、24歳のときころざしを持ってこの地にやってきてから半世紀近くが過ぎたという。工房をちよつとだけ覗かせてもらった。伝統工芸士に認定され、たくさんいい仕事をしてきたにちがいない大ベテラシに敬意を表すると、「いやあ、ははは」。飄々と仙人ふうの印象である。

## 綽如上人が開いた瑞泉寺

井波には木彫刻の長い歴史が流れ、現在も100人をこえる数の人が制作に携わっているという。まさに日本を代表する木彫刻の聖地である。そのみなもとが八日町通りに導かれる古寺であると聞いてきた。真宗大谷派井波別院瑞泉寺だ。

山門が見えてきた。瑞泉寺は、砺波市と南砺市にまたがる高清水山系の北端であ



田中孝明さん

## 表現の灯を外に発信



宿泊施設Bed and Craft  
〈TATEGU-YA〉に飾ら  
れている田中孝明さん  
の作品。上から「たね」  
「みず」「ひかり」。田中  
さんの作品にモデルは  
おらず、頭に思い描く  
抽象的なテーマを具現  
化するものとして、女  
性像を刻んでいるのだ  
という



井波彫刻は欄間、というイメージを強く  
持っていればいるほど驚きが大きいのが、  
田中孝明<sup>こうめい</sup>さんの作品である。最初に目にし  
たのは、3体の女性像だった。細やかに匂  
い立つような小さな姿。それぞれ名がつい  
ていて、「たね」「みず」「ひかり」。田中さ  
んは言う。

「観る方がその方なりの種子を見つけてい  
ただき、水を与え、光を浴びて芽を出して  
いけるように、との願いです」

表面の滑らかさも鑿<sup>う</sup>だけの技だ。サンド  
ペーパーではどうしても質感が生まれな  
糸のように細い刃で、囁く<sup>ささやく</sup>ように削<sup>く</sup>ってい  
くのだろう。

出身は広島だ。小さいときから工作が好  
きだったこともあり、富山の工芸高校に進  
む。卒業後すぐに親方に弟子入りする。現  
在ではまれなケースとなっているが、住み  
込みによる師弟関係を5年間過ごして修業  
した。

独立後は当然ながら、すぐにあちこちか  
らひっぱりだこというわけにはいかない。  
すでに結婚していた。妻は漆工芸に携わ  
っている。

「お内裏さまとお雛さま、一对の親王飾り  
を風呂敷に包んで、妻といっしょに京都を  
売り歩いたこともありました」

思えばこれまで、果たしてこの道を進ん



## 石原良定さん 造形力と想像力と



【右】工房には、石原さんの使う鑿がずらりと並ぶ。井波の彫刻師は数百本の鑿を使い分けるといわれ、弟子入り後、石原さんのはじめての彫刻修業は鑿の柄を作ることだったという 【左】毘沙門天像の原型。粘土で塑像をつくってから木彫に入るのが石原さんの制作スタイル

石原良定さんは仏師だ。文殊菩薩、聖観音、毘沙門天、不動明王などなどの仏像をこれまでに多く手がけてきた。千数百年をこえる歴史を背景に持つ文化の継承者である。工房には制作途上の小さな仏像が鎮座している。見るほどに精緻だ。

群馬に生まれ、高校卒業後、アメリカの大学に進むが中退し、オーストラリア、カナダなど海外で3年間を過ごした。帰国してすぐ井波を訪ねた。彫刻志願である。

「親方を求めて歩きましたが、ちよつと年齢がいつていたせいか（22歳のときである！）、なかなか採用してもらえず……」

そうしたなかで、仏師に巡り合った。風来坊のような若者にも誠実に向き合い、この仕事の意義を論してくれた。この道だ、と意を強くして入門し、修業に没頭する。「仏像には長い歴史が沁みていますから、伝承の型があります。勝手に発想を広げることではできません。が、画一的かといえそうですがではない。作家の独自の想いが細部にこめられているということを知りました」

### 手仕事だから得られるもの

独立してから、仏像以外にも試みる。武将などの歴史上の人物もそのひとつだ。ただしあまりポピュラーでなく、知る人ぞ知る

旅行鞆に、本を詰めて



# ホンタビ!

第21回

文＝川内有緒  
Kawauchi Ario

写真＝荒井孝治  
Arai Koji

作家の川内有緒さんが、本に動かされて旅へ出る――。  
登場人物を思うのか、著者について考えるのか、それとも誰かに会ったり、何か食べたり、遊んだり？さて、今月はどこに行こう。本を旅する、本で旅する。

今月の本

福島あずさ著／nakaban 絵  
『窓から見える世界の風』  
(創元社)



気象学者である著者が、インドの局地風「エレファンタ」や地中海沿岸部に吹く「トラモンターナ」など世界の50の風を、画家・nakabanの絵とともに紹介・解説する一冊。恵みの雨をもたらす風もあれば、人間にとって脅威となる風もある。それぞれの風が持つ土地との結びつきを感じながら、旅するようにページをめくりたい

＊本文中太字の箇所が本書からの引用です

## 風とともに旅する浜松 (静岡県浜松市)

30年も前のことだが、風に意思があるのかを研究しているという風変わった男性に出会った。大学院で哲学を専攻していて、穏やかな佇まい。英語教師でもある彼は、「クラウド・ナイン」という英語表現を覚えてくれた。直訳すれば「9番目の雲」で、圧倒的に幸せな時の感情表現である。

それから25年後、偶然入った本屋さんの「窓から見える世界の風」という一冊を見つけた。著者は福島あずさん。モンスーンなど気象現象の研究者である。

毎年5月開催の「浜松まつり」の風揚げ合戦。風糸を互いに絡ませ、摩擦で相手方の糸を切ることからケンカ風とも呼ばれる 写真提供＝浜松・浜名湖ツーリズムビューロー



「浜松まつり会館」では各町の頭文字や初子(ういご)の名前が描かれた大風を展示。ミニ風揚げ体験も ☎053-441-6211



皆さんは「風」にどのようなイメージを持ちますか？ 空の雲は、その形をはっきりと見ることができず、降ってきた雨には触れることができます。それでは、吹いている風を手でつかんだり、目で見たことのある方はい



おいしいもんには  
わけ  
理由がある

第54回

文＝土井善晴  
Doi Yoshinori  
写真＝岡本寿  
Okamoto Hisashi



本わさびをすりおろし、おかかと炊きたてご飯でいただくわさびご飯は、爽やかな辛みとほのかな甘みをダイレクトに味わえる



天城山塊の懷で育てる本わさびは、鼻にツーンと抜ける爽やかな辛みが印象的

# 天城の清流が育む本わさび

《静岡県伊豆市》



滝尻わさび園の清流に感動し、柔らかいわさびの葉を摘んで「ゆがいておひたしにしよう」と、うれしそうな土井さん。生わさびならではのおいしさを味わうには、根茎の上部にある茎を削りとって、先端から目の細かい(鮫皮などの)おろし板で、『の』の字を書いてこねるようにすりおろすのがコツだそうです

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』(新潮社)など著書多数

わさびの鋭い辛みは鼻の奥にツーンと抜ける。よどまず、さっと消えうせる。緑色のわさびは清らかにして潔し。日本の精神文化にびたりとはまり、武士である徳川家康がとくに好んだというの合点がいきます。わさびを「山葵」と書くように、徳川家の家紋(三つ葉葵)にある葵の葉にわさびの葉がよく似ていることもその理由のひとつかもしれません。

地球の表面を覆う厚さ100キロメートルほどの巨大な岩板を「プレート」といいます。複雑な地殻変動によって、プレートは長い年月をかけて移動して隆起し、複数のプレートが相接してできたのが日本列島です。南方のフィリピン海プレートは本州が乗っているユーラシアプレートの下に沈み込みながら、2000万年前から北上しはじめました。その時、後に伊豆半島になる「海底火山群」も南方から移動して、100万年前に本州に衝突。その後も火山活動と地殻変動を繰り返し現在の伊豆半島になりました。

標高差が全国でもっとも大きい静岡県では、南方からの暖かく湿った空気がため込



天城山塊の清水の湧き口そばにある滝尻わさび園のわさび田

まれることで内陸に大量の雨(雪)が降ります。天城山では2019年に年間降水量5552ミリを記録しました。雨水は、伊豆半島の岩盤にある溶岩の小さな穴を通じて浄化され、地層に蓄えられ、無数の湧水となって、清らかな水や温泉の恵みを生むのです。

## 天城山塊の懷にあるわさび田

地図で見ると伊豆半島のほぼ真ん中にある「滝尻わさび園」を訪ねました。滝尻とは、ほど近い浄蓮の滝の下流の意。私たちを迎えてくださったのは、5代目主人の浅田芳孝<sup>よしただか</sup>さん、恵子さんご夫妻と次男の正志くん。99歳になるおばあ様もわさびの仕事